尿管結石破砕術後超音波検査における早期発見・予防への取り組み

◎中島 佳那子[1)]、糸川 沙耶[1)]、井田 葉津季[1)]、西村 はるか[1)]、宇城 研悟[1)]
松阪市民病院 中央検査室[1)]

【はじめに】尿路結石に対する体外衝撃波結石破砕術（Etracorporeal shock wave lithotripsy：以下 ESWL）や経尿道的尿管結石破砕術（Transurethral lithotripsy：以下 TUL）は、術後に血腫や尿管狭窄に伴う水腎症などの合併症が起こることがあり、その予防や早期発見を目的に血液検査やレントゲン撮影（腎尿管膀胱撮影：KUB）と併せて、超音波検査を施行することが推奨されている。当院では ESWL 及び TUL のクリニカルパスに術後翌日の超音波検査を導入し、臨床検査技師が検査を行っている。今回、尿管結石破砕術後合併症の早期発見、予防に対する取り組みについて報告する。【対象】2019 年 5 月 31 日から 2021 年 9 月 30 日の 2 年 4 か月間で施行した ESWL 施行後の超音波検査 97 件（53 名）と、2020 年 9 月 30 日から 2021 年 9 月 30 日の 1 年間における TUL 施行後の超音波検査 56 件（52 名）を対象とした。【当院での運用】当院では ESWL、TUL ともに原則 1 泊 2 日入院で行っている。以前は主治医が ESWL 及び TUL 施行翌日に泌尿器外来にて超音波検査を施行していたが、2019 年 5 月 31 日より一部の医師から運用を開始した。その後 ESWL では 2020 年 5 月 21 日、TUL では 2020 年 9 月 30 日よりクリニカルパスにて超音波検査室での導入を開始した。ESWL 施行後は腎被膜下血腫や周囲血腫などの有無を評価する目的で腎臓を評価している。また TUL 施行後は水腎症や膀胱内の出血等を疑う所見の有無を評価する目的で腎臓、膀胱などを評価している。【結果】ESWL 施行後の超音波検査で腎被膜下血腫を疑う所見は 3 件（3.1%）であった。TUL 施行後の超音波検査で水腎症の所見を認めた件数は 29 名（51.8%）であった。またいずれも検査時は無症状であった。【考察】ESWL や TUL 施行翌日に CT 検査や超音波検査を施行し、血腫や水腎症の有無を確認することは術後合併症の早期発見、予防するために重要であり、無症状の症例に対しても有用とされている。当院でも今回 3 例の腎被膜下血腫を疑う所見を認め、無症状であったことからも、翌日の超音波検査を行うことが合併症の早期発見につながると考えられる。【まとめ】今後も運用を継続し、尿管結石破砕術後合併症の早期発見、予防に努めていきたい。連絡先－0598-23-1515